

令和 6 年 5 月 17 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02774

研究課題名(和文) 非教育学部の教職課程履修学生の教職課程イメージに関する探索的研究

研究課題名(英文) Research of the image of teacher-training courses among student teachers in non-faculty of education

研究代表者

三島 知剛 (MISHIMA, Tomotaka)

岡山大学・教師教育開発センター・准教授

研究者番号：10613101

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、非教育学部における教職課程履修学生の教職課程についてのイメージやイメージの変容の可能性を探索的に検討することであった。調査の結果、「大変さ」「被教育体験の振り返りの機会」など計11因子からなる教職課程イメージ尺度が作成された。また、1年生と4年生で教職課程イメージに違いが見られることや実習前後で学生の教職課程イメージが肯定的に変容することが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の成果は、次のような3点の学術的・社会的意義を有する。1点目は、教育学部以外に所属する学生で教職課程を履修する学生の教職課程イメージを実証的に検討したことである。2点目は、教職課程イメージを測定するための尺度を作成したことである。3点目は、教職課程イメージが変容する可能性を示唆できたことである。

以上のことから、本研究が、非教育学部における教職課程履修学生の理解や支援の検討のための一定の貢献ができたと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explore the image and potential for change in the image of teacher-training courses among student teachers in non-faculty of education.

As a result of the questionnaire surveys, the major findings were as follows: (a) “Teacher-training Courses Scale” was developed, revealed 11 major factors consisting of “difficulty”, “opportunity to reflect on the educational experience” etc. (b) The score of image of teacher-training courses differ between 1st year students and 4th year students. (c) The image of teacher-training courses changed positively after practice teaching.

研究分野：教師教育

キーワード：非教育学部 教職課程履修学生 教職課程イメージ 教育実習

1. 研究開始当初の背景

教員免許状の取得は、教育学部生のみならず、教育学部以外の学生も要件を満たすことで可能である。教育学部以外の学部所属し教職課程を履修する学生(以下、全学教職課程履修学生とする)は一定数存在すると考えられるが、所属学部を卒業するために必要な単位に加え、教職課程の科目も履修することとなる彼らの教職課程を履修する目的や動機は様々であると考えられる。また、全学教職課程履修学生の全員が教員志望とは限らない。教職課程の質保証の重要性やその必要性が増してきていると考えられる昨今、彼らが教職課程の履修やそこでの学びをどのように意味づけているのかということの詳細に検討することは、彼らを理解することや、支援していくための一つの基礎資料となると考えた。

全学教職課程履修学生を対象に教職課程に関する意識について検討した研究も見られるが(伊藤,2020,宮下,2021),より詳細な分析の必要があるだろう。深見(2006)では、イメージは、教師や教員志望学生の実践的知識において彼らの実践を方向づけ、彼らが実践場面を解釈する中核的な役割を果たすと言われているものとされていることから、本研究では教職課程に対するイメージに着目することとした。

また、教職課程イメージを捉えるための方法の工夫や尺度も必要となってくると考えられる。本研究ではメタファーを用いることとしたが、こういった方法で全学教職課程履修学生の教職課程イメージを検討している研究は希少と考えた。

また、全学教職課程履修学生の教職課程イメージは固定ではなく変容する可能性も考えられ、その点についても検討を行う必要が考えられた。特に教育実習は実習生が教師としての学びを深めたり成長したりする上で重要な機会の一つであることや、実習生にとって大きな出来事であると考えられることを踏まえ、全学教職課程履修学生の教職課程イメージも実習前後で変容する可能性があり検討の必要性が高いと考えた。

2. 研究の目的

以上を踏まえ、本研究の目的は全学教職課程履修学生の教職課程についてのイメージやイメージの変容の可能性を探索的に検討することを目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために以下の3つの調査を行った。

(1) 教職課程イメージ尺度作成に向けた項目の原案収集及び教職課程イメージの検討のための予備的調査

教職課程イメージ尺度の項目の原案を収集すること及び教職課程イメージの検討を行うために、全学教職課程履修学生を対象にメタファー法を用いた調査を行った。具体的には、「教職課程とは~のようなものである」の文章の~に入る比喩を考えて回答すると共に、その比喩にした理由を、回答するように求めた。また、教職課程履修年数によるイメージの差異がある可能性を踏まえ、記述を件数として得点化して、1年生と4年生で比較を行った。

(2) 教職課程イメージ尺度の作成のための質問紙調査

メタファー法を用いた(1)での調査結果を参考にしつつ、メタファー項目を作成し、教職課程イメージ尺度の原案を作成し、全学教職課程履修学生を対象に調査を行った。具体的には、「教職課程は~のようである」という比喩表現の各項目に対してどの程度そう思うかを訪ねる形式とし、回答は「全くそう思わない」~「非常にそう思う」の5件法で求めた。また、因子分析で得られた各因子の得点について1年生と4年生で得点に違いが見られるのかどうか比較を行った。

(3) 教育実習前後の教職課程イメージ変容の検討のための質問紙調査

作成した教職課程イメージ尺度を用いて、非教育学部における教職課程履修学生の教職課程イメージの変容について実習前後の調査により検討を行った。また、教員になるかどうかといった進路希望の影響の可能性を考え、進路希望として「教職(中学校または高等学校の教員)」「民間企業(学習塾などの教育関係)」「教育に関係しない職種」の選択肢を設け進路希望によって教職課程のイメージや実習前後の変容に違いがあるかについても併せて検討することとした。なお、調査対象者の実習の実施時期には一定の幅があり厳密な実習前後の調査は困難であることや調査協力者の回答負担軽減を考慮して実習後に実習前と実習後の2時点を振り返ってそれぞれ回答を求める形式とした。教職課程イメージの各因子の得点について時期と群の2要因分散分析を行った。

4. 研究成果

(1) 全学教職課程履修学生を対象にメタファー法を用いた調査を行い、分析の結果、「教師になるための学びの場」など、多様なカテゴリーに分類することができ、全学教職課程履修学生の教職課程イメージの諸側面について捉えることができた。また、調査協力者の記述を件数として得点化して、1年生と4年生で比較したところ、「教師になるための学びの場」「被教育体験の振り返りの機会」においては1年生の記述数が多く、「大変さ」「長期的な学びの場」においては4年生の方が記述が多いという結果が得られ、1年生と4年生では教職課程イメージに違いがある可能性が示唆された。また、本調査により教職課程イメージ尺度の作成を行う上での項目の原案を獲得することができた。本調査結果は日本教育心理学会第64回総会にて発表を行った。本発表を通して本テーマの重要性についての認識を再確認するとともに今後の研究の可能性についても知見を得ることができた。

(2) メタファー法を用いた(1)での調査結果を参考にしつつ、メタファー項目を作成し、教職課程イメージ尺度の原案を作成し、全学教職課程履修学生に質問紙調査を行い、因子分析を行うことで11の因子に集約することができた。具体的には、「能動的な学びの場」(項目例：積み木)、「大変さ」(項目例：おもしろ)、「自分を知る場」(項目例：自分探し)、「限界性」(項目例：いいとこどり)、「教師になるための学びの場」(項目例：教師になるための準備)、「被教育体験の振り返りの機会」(項目例：思い出アルバム)、「将来の保険」(項目例：転ばぬ先の杖)、「お得意」(項目例：無料コンテンツ)、「様々な人との交流の機会」(項目例：人脈づくりの場)、「長期的な学びの場」(項目例：長丁場)、「人としての成長の場」(項目例：社会勉強)であった。各因子の係数もおおむね十分な値を示しており、ある程度の信頼性をもった尺度が生成できた。

また、各因子の得点を1年生と4年生で比較したところ「被教育体験の振り返りの機会」「お得意」については1年生の得点が高く、「長期的な学びの場」については4年生の方が高い傾向が見られた。(1)の結果も踏まえ、教職課程イメージは1年生と4年生では異なるということも明らかにすることができた。なお、本調査結果は日本教育心理学会第65回総会にて発表を行った。本発表において解釈の問題や改善すべき等の指摘はなく、概ね妥当性のある尺度が作成できたと判断した。複数の因子からなる本尺度は全学教職課程履修学生の教職課程イメージを測定する上での1つのツールとなる可能性が考えられる。

(3) 作成された教職課程イメージ尺度を用い、4年生を対象に実習前後での教職課程イメージの変容について調査を行い、分析を行った結果、時期の主効果あるいは主効果の傾向が「能動的な学びの場」「自分を知る場」など複数の因子において見られた。いずれも実習前と実習後では実習後の得点が高かったことから実習後に学生の教職課程イメージは変容することが示唆された。

また、「被教育体験の振り返りの機会」において、時期と群の有意な交互作用が見られた。単純主効果の検定の結果、卒業後の進路希望として選択肢として設けた3群のうち、「教職(中学校または高等学校の教員)」の群を除く2群(「民間企業(学習塾などの教育関係)」「教育に関係しない職種)」が実習後に得点が高まるという結果であった。このことは、教員にならない学生の実習前後での教職課程イメージの変容の特徴である可能性が考えられた。

一方、卒業後の進路希望に関わらず、複数の因子で実習後に得点が上昇していること、変容の見られた因子はどれも肯定的な側面を表すものと考えられることから、彼らが実習後に教職課程を肯定的にとらえていることや教職課程の履修やそこでの学びを肯定的に意味づけている可能性が示唆された。このことは教育実習を経験することにより全学教職課程履修学生は教職課程を履修することやそこでの学びの意味づけが実習前に比べて容易になった結果とも考えられる。教育実習を通して学生の教職課程イメージが変容することを実証的に明らかにできた点は本研究の成果であると考えられる。

<引用文献>

- 深見俊崇(2006)教師・教員志望学生の実践イメージに関する研究動向と課題．人文研究，57，78 - 95.
- 伊藤直樹(2020)明治大学における教職課程履修学生の教職に関する意識．明治大学教職課程年報，42，9 - 18.
- 宮下治(2021)開放制教職課程履修学生の教職課程に対する意識調査研究 - 2016、2018、2020年の調査結果から - ．明治大学教職課程年報，43，55 - 64.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 三島知剛
2. 発表標題 全学教職課程履修学生の教職課程イメージに関する研究 メタファー法による検討
3. 学会等名 日本教育心理学会第64回総会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 三島知剛
2. 発表標題 全学教職課程履修学生の教職課程イメージに関する研究（2）－教職課程イメージ尺度作成の試み－
3. 学会等名 日本教育心理学会第65回総会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------